



2000年のパシルマスから

坪内良博*

いきさつ

7月下旬からマレーシア・クランタン州のパシルマスの町外れに住んで40日あまりが過ぎたところでこの文章を書き出そうとしている。筆者は30年前の1970年7月から翌年7月まで、1年余にわたってパシルマス郡の農村ガロックの調査を行なったが、今年はそれから30年目にあたるので、マレー農村の変化と不変化の様相をみたくてやってきたのである。もっとも30年ぶりという訳ではない。1991年には20年間の変化を調べているし、それに先立って70年代や80年代にも簡単な再訪調査を行なっているからである。数年前に経済危機があったとはいえ、マレーシアの変化は著しい。その変化が農村の家族をどのように変えてきたか、あるいは変えていないかを観察するのが今回の目的である。

クランタン州は、マレー半島東海岸に位置し、マレー人が相対的に多く、イスラム政党の勢力が強い州である。パシルマスは州都コタバルから15キロメートルばかり離れたクランタン川沿いの小さな町で、30年来の調査地ガロックは、この町からさらに15キロメートル離れて同じクランタン川沿いに1.5キロメートルにわたって道路沿いに展開している。

ハジ・ラムリーの家に住む

ハジ・ラムリーは、70歳を目前にした元ブンガワ(郡長の下、村長の上に位置付けられる地方官吏)の年金生活者である。1970年にガロックで調査を始めたとき、パシルマス郡役所の書記をしていて何かと面倒を見てくれた人だが、それから30年の付き合いがあり、今回の調査に際しても適当な宿と車を探しておいてくれるように頼んでおいた。結論的に

は、彼の家の最も良い部屋に食事・洗濯付きで世話になることになった。今回の調査では、定年を間近に控えた筆者といえども、調査村の中に住むことが十分可能と判断された。電気・水道・電話がいきわたっており、後に述べるように住宅も大幅に改良されているからである。村の中に拠点を設けることも考慮していたが、快適な生活に甘んじたために実現せずに終わった。

ハジ・ラムリーの住まいはパシルマスの町から少し離れた一つのカンボン(むら、または集落)の中にある。町から比較的近いために、このあたりには水田は殆どないが、まだ空き地は多い。彼は21年前に政府のローンを借りて、4分の1エーカー(約1,000平方メートル)の土地を4,000リングットで買い、そこに14,000リングットの家を建てた。(現在1リングットは約28円に相当するが、当時の換算レートはもっと高かった。)二階建ての主屋が上下で200平方メートル、それに40平方メートルのダポール(炊事場)が加わって、日本的な感覚からすればかなり大きい。階下は平土間で、敷物を敷きめぐらして日常の生活空間となっている。階上には二つの寝室と書斎などがある。この形式の住宅は高床のマレー式家屋の変形として当時はやったものである。21年の歳月を経て、合板の板壁に塗った白いペンキは少しばかりはげている。

筆者は、この家の主寝室に相当する、大きなダブルベッドが入った10畳ばかりの部屋を占拠している。もともとあったグリーンカーペットの上にダークブルーのカーペットを張り、ベッドと家具の間の空間にさらにもう1枚ブルーの敷物を置いている。合板の壁にはピンク系のペンキが塗られている。この家で快適な生活は、筆者の宿泊を契機に1,600リングットを投じて設置されたエアコンに負うところが大きい。果樹などに囲まれたカンボンの家は昼間でも比較的涼しい感じがするが、大きな樹木が少ない郊外の住宅は熱帯の太陽の直射を受けて、日中では階下でも30度から32度、階上では35度に達する

* Yoshihiro Tsubouchi, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科; Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

ことがしばしばある。エアコンのおかげでそれを30度まで下げることができる。天井が高く部屋の容積が大きいので小型の空調機にとってはこれが限界なのだが、湿度も若干下がるので能率の向上が著しい。

高床式の住まいとしては珍しく、階上にもトイレと水浴場が設置されている。トイレはマレー式でトイレトペーパーはなく、プラスチックの水がめからプラスチックの柄杓で水を汲んで水洗できるようになっている。水浴場には大きなプラスチックの水がめが三つも並んでいる。パシルマスの水道事情は劣悪で、夜中になって水圧が高まると階上まで水が届くのでそれを溜めておくのである。

ハジ・ラムリーの奥さんは料理が趣味だという。婦人学級などでも研鑽をつんできたらしい。滞在期間中、腕を振るっていろいろな料理を作ってくれた。クランタンの料理は西海岸のケダーなどに比べて、辛味が少なく甘味が強いのだが、さらに気をつけて辛過ぎないように注意してくれているらしい。日本人は野菜を多く食べるから平均寿命が長いということも知っていて、野菜スープなども出てくる。伝統的にマレー人は野菜をあまり食べなかった。そのせいか、料理された野菜の歯ざわりが全体として生硬い。食べる野菜というより風味を添える野菜としての扱いなのかもしれない。用いられる香辛料の種類は極めて多い。自家栽培の柑橘類や匂いの強い葉っぱなども使われている。それらに加えて、近頃では、配合して商品化されたものもよく用いられるらしい。コタバルのスーパーマーケットでは、鶏肉用、魚用、バナナ用など用途が特化された唐揚げ粉が売られている。この家の台所にも多くの種類のインスタントものが置かれていることがわかった。そ



写真1 古いタイプの高床家屋

のことは、新しい調理法の導入として誇らしげに語られる。調査の終わりの時期にトレンガヌからやってきて、扇風機がきしむ第二寝室を明け渡してもらって一泊していった河野元子さんの発見である。

ハジ・ラムリーの家から真っ赤なボディのマレーシア国産車プロトン・サトリアを駆って、15キロメートル離れたガロックへ通った。道路が拡幅されて平均20メートルくらいの幅があるので、20分で到着する。既に9万2,000キロメートルを走っている割に快調な車であった。もっとも調査の後期に入って、走行中にスモールランプが車体から抜け落ちて転がっていった。

ハジ・ラムリーとその家族

調査村について書く前に、ハジ・ラムリーとその家族について少し紹介することにする。既に述べたように同氏は元ブンガワである。ブンガワというのはクランタン州特有の職制で郡長とブングル（村長相当）との間に介在する。郡役所の書記からマチャン郡のブンガワに転出し、最後にパシルマス郡の中心地パシルマス周辺のブンガワを勤めて55歳で定年退職した。パシルマス周辺のブンガワに任命されたのは、町に近く外国人も来ることがあるので、英会話の能力を買われたためだという。実際、英語の話せるブンガワは珍しいのである。筆者とも半分くらいは英語で、半分くらいはマレー語で話す。切手の収集が趣味で、それが通信販売を通して僅かながらも実益をもたらし、定年後の生きがいにもなっている。

政治的に無関心という訳ではないが、政治に深入りしたくないという性格である。若いときにはそれほどでもなかったが、歳相応に宗教的になってきて、既に夫婦でメッカ巡礼を済ませたし、今年の11月には、クアラルンプールの娘夫婦などと再度のメッカ行き（ウムラー）を計画している。しかし全体としては、生活向上を謳歌したいほうで、この点でマハティールの政策に同調的である。年齢や地位と共に権威主義的な性向も生じていて、カンボンの生活との差を強調することもある。たとえば、カンボンの人々が一袋2リングットで買うスラヤン（魚の名）は、町（すなわちわが家）では食べないといった調

子である。夫人は調査村ガロックの近くの出身で、ガロックにも何人かの親戚がいる。それらの家を訪ねると、そのような親族関係が話題になるが、互いに訪ねることは殆どない。微妙な階層差の意識が付き合いの分離を引き起こすのだと同氏は説明する。

ハジ・ラムリーには6人の子があるが、いずれも成人している。ややプライベートに深入りすることになるが、現代マレー家族の特性の多くがそこに見られるので、簡単に紹介しよう。長女は教師と結婚して近くに住み、3男3女がある。小さな小学校の校長になった夫は、来年55歳で定年を迎える。その長女（ハジ・ラムリーの孫娘）はペナンの大学の医学部を卒業して、筆者の滞在中にサラワク州へ赴任して行った。ハジ・ラムリーの二女は学校の宗教教師と結婚し、6男1女をもうけた。年金生活を送る60歳の夫と共にパシルマスの郊外に住む。三女はクアラルンプールで報道関係の仕事に従事している。夫は警察の上級職員で2男2女がある。30代なかばの四女は未婚で、しばらく姉を頼ってクアラルンプールで暮らしていたが、パシルマスに戻ってこの家に同居して華人系の幼稚園で働いている。5番目の子が唯一の男子で、米国の大学で建築を学び、コタバルで3人のスタッフを雇って設計事務所を開いている。2女がある。現在は借家住まいだが、コタバルとパシルマスとの間に建設中のニュータウンに36,000リンギットの低所得層用（つまりマレー人用）のテラスハウスをローンで購入して、10月には移転の予定である。一番下の五女は、マラッカ出身の男性と結婚していたが、離婚して、コタバルの兄の家に同居して、スーパーマーケットで働き、フロアの責任者に昇格したところである。5歳の息子があって、祖父母であるハジ・ラムリー夫妻がその面倒を見ている。母親は週一回水曜日の休日にやってきて泊まっていく。

ハジ・ラムリー夫妻は、筆者を（多分）敬意を込めて、プロフェッサーと呼ぶ。大学関係者はプロックと呼ぶことがよくあり、調査の途中で診察してもらった眼科の医師もそうした呼び方をしたので、クリニックまで連れていってくれた同氏も一、二度その呼び方を取り入れようとしたが、結局元に戻った。同居の四女と孫とは、筆者をアングルと呼ぶ。マレー語で言うパッチ（小父さん）の英語版である。マ



写真2 すこし古いタイプになった家

レー人と区別されていることを意識せざるを得ない呼称でもある。

調査あれこれ

ガロックの全戸調査を行なった。200余戸の集落なのでかなりの作業である。1970/71年には、十分時間をかけて、一日一戸か二戸の聞き取りを行なったが、今回は人口と世帯の変動に焦点を絞って、できるだけ短い期間で完了することを目指した。1970/71年および1991年時点での世帯構成は既に記録されているので、それらをもとにして聞き取りを行なった。1970/71年時点の調査票のコピーはパシルマスまで郵送してある。1992年に松下敬一郎氏（関西大学経済学部教授・元東南アジア研究センター助手）が、年次変動を把握するための世帯調査を行っており、その時の各世帯の写真を預かっていたので、それらを配りながら各戸を訪問した。手土産としてコタバルのスーパーマーケットで購入した1.95リンギットのビスケットを持参した。1970/71年の調査のときには、マレー風の粉末コーヒー、砂糖、練乳をセットにして配った。同じ位の金額だが、当時の日当が3リンギット程度だったことを考慮すると、長時間の聞き取りとはいえかなりはりこんだものであった。当時の村にはコーヒーもめったに飲めない人がかなりいたので、このことを今でも覚えている人がある。

写真を導入に使うて聞き取りを開始し、世帯構成員の出生、死亡、結婚、離婚、転入、転出、現在の仕事などを聞いていく。フィールドワークから長い間遠ざかって、錆び付いたマレー語での質問だが、



写真3 手づくりの家

内容が比較的簡単なので、基本事項の聞き取りだけは自分でできることがわかった。

今回の調査のためには、マレー人の助手を二人雇って一緒に歩いて貰った。一人は学校書記の40代の男性で、もとガロックに住んでいたが、今では隣のチェコックのはずれに自分の家を建てている。亡くなった父親が一時プングルを勤めたことがあり、親子とも英語を話すことが好きだといわれている。時間にルーズなことが玉にきずだが、記憶力が素晴らしく、住民の動向や村のできごとを正確に覚えている。他の一人は、彼の同年輩の友人で外資系の開発会社に勤めて看板画きなどをしていたが、今ではチェコックに戻って、父親が所有する5キロメートルばかり離れたゴム園に夫婦で単車で通って、タッピングをしている。天気は左右されるタッピングを休んで、調査を手伝うことになった。二人とも、7、8人の子持ちである。学校書記のニックアズマンには本業の勤務時間外の午後4時から6時半まで、タッパーのカリッドには朝8時半から12時半までを割り当てた。午前中は実直なカリッドとできるだけ多くの世帯を訪問し、夕方は人々の実状に詳しいニックアズマンと一緒に、時にはゆっくりと雑談を交えながら聞き取りを進めた。

何が変わったか

1991年の時点でもさまざまな変化が目についたものである。変化に惑わされず、不変を追求できるならば、そこに地域研究の醍醐味があろうというもの、とにかく変化のほうが目につき易い。

道路幅が拡張されて、交通が便利になっている。

1.5キロメートルにわたる集落を通り抜けると家々に自動車が駐めてあるのが目に付くようになった。ざっと数えたところでは、3分の1の世帯が車（バンを含む）を所有している。ほとんどがかなり年代を経た中古車である。マレーシアでは中古車の値段が高く、助手のカリッドに言わせれば、先に紹介した筆者のプロトン車でさえ、35,000リンギット位するだろうという。自動車がなくても単車（モーターと呼ぶ）を所有することが多い。交通手段の確保がこの村と近くの町との関係を強めている。ガロックはパシルマスとタナメラ（隣郡の郡役所所在地）の中間点にあるが、木材関係の工業団地ができたこともあって、行政的には隣郡になる後者との関係が強くなっている。

自動車と違ってそれほど目に付かぬものの、より顕著な普及状況を示しているのが電話である。既に半数近くの世帯が備えている。ここ3年のうちに急速に広まっており、この1年以内に設置したものが目立つ。スランゴールやジョホールに出て、工場労働者として働く若者が多いのだが、電話はそうした外部への他出者と村とをつなぐ重要なよすがなのである。

集落の外観上の驚くべき変化は、都市郊外の住宅に見られるような新しい様式の家屋が道路沿いに点々と見られることである。1個0.40ないし0.60リンギットのブロックを積んで建てた平土間式の家屋は、セメントをなでつけてペンキで上塗りすると、たちまち見栄えのする建築物になる。新しい自動車と同じ位の費用をかければそこそこの建物が完成する。周囲をフェンス（目障りなのだが）で囲って門扉を取りつけた場合には、その間口の広さのゆえにとかく目立つ存在なのである。

このような家屋のかなりのものは教師の家である。これらの家屋ほど完成度は高くないが、家屋の主要部分にブロックあるいはレンガを用いた建物つまり石の家（ルマ・バトゥ）が増加している。東南アジアの他の地域と同様、木材価格の上昇が建築様式の変化を招いたともいえる。高床家屋ももちろん残っているが、多くは板壁がくすみ、あるいは塗装が古くなっている。入り口に取り付けられた木の梯子を見ることはまれで、コンクリートあるいはレンガの石段に代えられている。高床家屋の主屋から一

段下げて設けられた台所（ダポール）は、石造の増加とともに、さらに低くなって平土間的な位置を与えられるようになった。外観の変化にもかかわらず、道路から少し離れてカンボンに入るとそこには少し静かな空間がある。以前にも増して、ドリアン、ドゥック、ランブータンなどの果樹が目立つ。ドゥックと呼ばれる丸い小粒の果物は、この地方に多く、仲買人がやってきて買いつける換金作物でもある。ひときわ樹高が高いドリアンは、ちょうど今その季節なのだが、今年は成りが悪い。

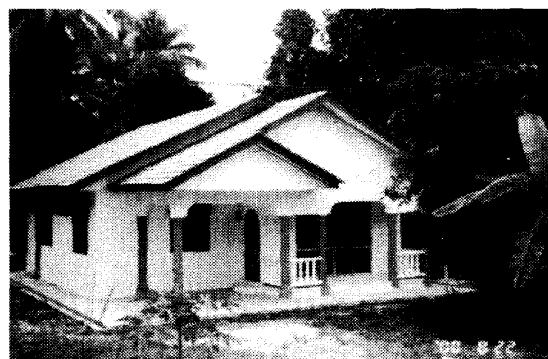


写真4 新しいブロックを用いた家

職業の変化

村の人口の職業構成にはまた変化が起こっている。給料取りの増加が目立つ。先に述べた教師はそのトップクラスに位置し、ガロック全体で男女合わせて20人もいる。ガロック出身の者も多いが、中にはガロックに土地を購入して住み着いた者もある。既に紹介したハジ・ラムリーの長女の夫ワンゼン氏は小学校の校長だが、夕食に招かれた後の雑談に、冗談とも本気ともつかぬ調子で次のようなことを言う。教師は給料が良い割に少ししか働かない。以前の教師は村人の相談に乗ったが、この頃はそういうことをしない。だから教師は人々からの評判がよくない。このことはともかく、少なくとも給与・勤務条件の面では教師は村人の垂涎的である。教師の夫婦も何組かある。若いうちにはサラワクを含む遠方へ赴任させられることがあるが、伝手を求めて次第に故郷に向かって転勤を申請するのである。

政府関係の諸施設が拡充してくるにつれて、さまざまな公務員が生まれている。農村部にクリニックが開設され、医療助手、看護婦、救急車運転手などを仕事にする者もある。

交通事情の変化につれて、運輸関係の仕事に従事する者が増えている。前述の救急車運転手を含めて、大型トラック、バス、タクシーなどの運転手も目に付く存在である。通勤者が増えて、タナメラの木材関係の工場で働く者もある。例えば、ある合板工場の工員の日給は、男子15リングット、女子13リングット程度である。一家を養うには不足する金額で、家計補助的な女性や若者の労働力を吸収していた。近くの中学校の食堂で働く女性の日給は10リング

ト程度で、この点ではうまくバランスがとれている。ちなみにバシルマスの中学校食堂では、13リングットが支払われていて、ここでも微妙なバランスを見出すことができる。

給料生活者が増加した反面、自営の仕事を営む者もその存在を明らかにしてきた。その典型は大工職人である。1980年代から90年代の初めにかけてシンガポールへの出稼ぎは極めて目立った現象であったが、今では殆どなくなっている。そこで習い覚えた仕事が、ブロック造りの家屋の建築に生かされている。腕の良い職人は日に50リングットの収入があるという。とくにタイル工などが貴重な存在になっている。電気、電話の普及につれて、電線工事が請負で行なわれ、この種の仕事に従事する者が何人かある。

村の商店の品数は以前に比べて増えている。村の入り口のモスク付近にミニマーケットの看板を掲げて新たな商売を始めるために転入してきた家族もある。コーヒーショップの数も増えたし、そこで簡単な食事をすることもできる。バンを用いて野菜や魚の行商をする者、建築材料店を開く者等、ビジネスチャンスは明らかに増大している。

面白い人物がいる。ボンダンと呼ばれる女装の男性である。日本流に言えばおかまで、言葉遣いも女性らしい。ずっと独身で60歳を越えた。婚礼の飾り付けが得意で、わずかなゴムタッピングに加えて、婚礼業者として生計を立てている。衣装替え一回付のセット料金が500リングットで、電話も自動車も持たぬ商売だが、人々が口伝えに依頼に来るといふ。実はこの村には同じ年代のボンダンがもう一人いて、料理人として諸外国を回っていたというが、帰

郷して引退生活に入っている。

農業はどうなったか

ガロックで調査を開始した1970年には、この集落の住民の主な生業を、天水田稲作と小規模ゴムタッピングとして捉えていた。1980年代には、クランタンに安いタイ米が流入し、天水田稲作は殆ど放棄された。現在、タイからの米の輸入は規制され、国境近くでは検問所が設けられて米の移動をチェックしている。それと歩調を合わせるように稲作が村に戻っており、以前ほどではないが、2割ほどの世帯が稲作を行なっている。耕起作業はトラクター賃耕に頼って、田植えと刈り取りは自力で行なうことが多い。水田の場所によるが、収穫にケダールから持ち込まれる大型の機械を雇うこともある。収穫された米は以前と同様自家消費に当てられている。

1960年代後半からこの村にはタバコ耕作が導入され、一種のブームが生じたことがあるが、耕作の中心が海岸地方に移って耕作者が著しく減少している。それでも20世帯ばかりが耕作を続けている。今年も病気が多くが枯れたという。隣集落のチェコックとパダンハンクスに乾燥工場がある。チェコックの工場を訪ねると、経営者の息子が、タバコ産業は衰退中だと言いながら工場内を案内してくれた。設備のごく一部しか稼働していない。電気の乾燥設備もあるが、薪を用いた古い設備で操業している。これらの工場に雇われて、乾燥された葉の選別などの作業を行なう者が若干ある。

天水田稲作と並んで重要な生業であったゴムタッピングに従事する者も、総世帯数の2割弱に減少している。タッピングを行なう世帯の一部は稲作を行なっているが、他の者は行っていない。すなわち、稲作とゴムタッピングとは一部重複するが、完全に重複している訳ではない。採取されたゴム樹液の処理法に関してここ数年間に大きな変化が起こった。以前は酸を加えて凝固させ、ローラーにかけたものを自然に乾燥させていたが、今では数日間ボウルの中に樹液を溜めたままにして置き、適当な塊(グタブク)ができたところでそのまま袋に詰めて仲介業者に売る。手間が省けるので、タッピング面積を増やすことができるが、助手のカリッドのように遠く

に行かない限り、広い面積で作業することができない。1エーカー当たり一日平均10キログラム(1キログラムが約1リングット)が得られるが、2エーカー以上のタッピングを行なうものは少ない。

集落に近い水田では、乾期にはタバコの外に、カンコン(緑葉野菜の一種)、ティムン(瓜の類)、カチャン(ささげなどを含む各種の豆)、ウビクリン(いもの一種)などが栽培されている。いずれも市場で売られる商品作物である。住民の中には2エーカーばかりを使ってウビカユ(タピオカ)を栽培する者もある。水田の地目を変更して果樹園(ドゥスン)にした者もある。家屋は各種の果樹で囲まれているが、それらは自家消費用だけではなく、既に述べたように、巡回してくる仲買人によってしばしば現金化される。

稲作、タバコ耕作、ゴムタッピングに、日雇い仕事、副業的な商売、各種の雑業を加えるとその総体がカンボン仕事(クルジャカンボン)と呼ばれるものになる。雑業の中には猿を使ってココヤシの実を採取する仕事、ココヤシの樹液を集めてヤシ糖(マニサン)をつくる仕事、三輪自転車(ベチャ)による運送なども含まれる。定義にもよるが、少なくとも3分の1の世帯がこのカテゴリーに該当する。

農業はもはや集落の中心的な生業とは言えない。しかし、それは集落の景観を支えつづけている。就業者数は減少してきたが、農業が完全に放棄される状況にはまだ至っていない。

人口と家族の変化

今回の調査は、人口の変動と世帯編成原理の変化(あるいは不変化)を扱うものである。分析を完了



写真5 行商の準備

することなく、ここで結論を提示するのはいささか問題があるが、いくつかの印象だけを述べてみよう。

調査を始めるに当たって、1970年から91年の間に見られたような戸数の増加があるかもしれないと思っていた。集落の本体から少し離れて、ぼつぼつと建てられた家屋群が、カンボンバル（新村）と呼ばれるようになってきていることも、人口増加に伴う集落の膨張であろうと思った。新しい家屋も目立つが、取り壊された家屋も結構あるので、実際には戸数の増加はほんの僅かである。世帯の聞き取りから強く印象づけられるのは、20代を中心とする若年層がクアラルンプールをはじめとする都市へ移住していることである。この結果、人口自体には僅かながら減少が生じている。

在住の夫婦から生まれた子の数は以前と同様多く、5人以上の子がある夫婦はごく普通の存在である。しかし、在住する若い夫婦が少なくなっている。若年層は都会へ出て行くばかりではなく、村に住んでも未婚状態を続けることがある。20代後半の女性や30代の男性において未婚者を見出すことは普通となった。男性の中には40歳を過ぎて独身の者もいる。かつては25歳を越えて結婚経験のない者は皆無だったのである。この結果、ここ5年間ばかりの出生数が減少して、0-4歳人口は、5-9歳人口に比べて少ない。出生力の変化というよりは、年齢構造の効果である。

生産手段としての土地の意味が薄れ、宅地としての評価が高まっている。在来の居住者は大抵の場合、宅地と家屋なら所有しているので、結婚後の居住地選択に際して女性側の希望に沿って妻方居住となるケースが増えているような印象がある。

高齢者の間に夫婦だけで暮らしている世帯や単身世帯が目立つ。50歳以上の者に着目すると、双方とも50歳以上の夫婦のみの世帯が17戸、単身世帯が26戸も数えられる。近くに子の家族が住んでいる場合もあるのですべてが孤立している訳ではないが、集落内に親族がまったくいない者もある。子供がすべて他出している夫婦に将来の見通しを尋ねると、いずれ誰かが戻ってくるだろうという。ガロックに戻ってくる者は確かにある。年金生活者として戻ってくる者の存在にも着目すべきかもしれない。いなか

ではあるが、比較的便利な生活環境と安い生活費が魅力である。しかし、働き盛りの者に満足を与えることができるような環境は必ずしも整っていない。現在のところ、きわどいバランスが保たれていると表現すべきかもしれない。

ガロックを含むクランタン州では、かつては離婚が極めて多かった。結婚の半分は離婚に終わった時代がある。不謹慎な言い方をすれば、このような離婚の多さが家族関係にバラエティを生み出し、観察対象としての興味深さを発現させていた。この10年余りの間に離婚は激減している。マレーシア全域で、イスラム教徒の離婚に対して手続きが極めて面倒になったのである。結婚年齢が上昇したことも離婚の減少に寄与している。このような背景の中で、ガロックにおける離婚はこの10年間に数件を数えるにすぎない。

離婚が発生して、別れた妻が家屋の半分を運んで去ったなどという70/71年の調査時でのハブニングももはや再現されないが、教師の夫妻ともに村を去って、ブロック造りの新様式の家屋が残されているケースはある。別れた夫妻がそれぞれ村内に住み続けているケースもある。10年以上前に発生した離婚で、69歳の元の夫が4、5軒離れた家屋に単身で住み、64歳の元の妻はそれぞれ独立世帯を営む二人の娘と同じ屋敷地にやはり単身で暮らしている。トレンガヌの空軍に勤務する息子がガロックを訪ねてきて、父と母の家を巡って孫の顔を見せていった場面にもたまたま遭遇した。

もともと少なかった一夫多妻は、さらに減少しようとしているが皆無になった訳でもない。夫の死亡によって解消したものが少なくとも3件ある。二人の妻が左右対称に造られた家屋のそれぞれの棟に住んでいた珍しいケースも、4年前に夫が77歳で死亡し、第1妻は別の場所に移った。現在2件が複婚のケースに該当する。その1は、9歳と3歳の女兒を持つ41歳の妻が第2妻の立場で、自分の親と同居しているもので、夫は仕事の間をクアラルンプールに有している。その2は10カ月の女兒を持つ30歳の妻で、居住状況と夫の本拠は上の事例にそっくりである。

上に述べたような変化は、ガロックの世帯構成において見られた傍系家族や養子などの取りこみの機

会を減じている。従来ここに見られた柔軟な結合が発現する機会が少なくなり、世帯編成原理が単純化してきたと見えなくもない。そのなかで、数は減りつつも祖父母が孫と同居したりするケースがいくらか見られたりするるのである。

大きな流れの中で

ガロックが開拓村としての性格を持っていたことは、既にいくつかの報告の中でも言及してきた。ガロックの始まりは、1890年頃とみなしたが、開拓初期の状況を詳しくあとづける作業は行っていない。今回の調査中に、クランタン川対岸からきた初期の移住者について、断片的な情報を得た。道路に沿って1.5キロメートルにわたって展開する集落の南の部分と北の部分とでは、草分けを異にすることは当然だが、今回このことを確認した。初期の来住者を中心に、親族、姻族関係の網の目が密になっている部分が存在すると同時に、後期の来住者もその周辺に組み入れられている。均分相続やギャンブルによる所有権喪失などのため、初期の開拓者の子孫に特別な意味を見出すことは殆どできないが、現存高齢者の祖父の世代に遡ると、プングルの選任などを含む初期の有力者像が浮かび上がってくる。1970/71年の調査時には、在住者の父母に関する情報は収集したが、祖父母にまで遡ることをあえてしなかったことが悔やまれる。

クランタン川の河岸から内陸部へ向かって殆ど無制限とも言える所有権を手にした初期の開拓者の子孫は、交通の手段が川から道路へ移るのにしたがって、家屋を移動させ現在の居住状況をつくりあげてきた。一定の屋敷地の中に、親子が共住するいわゆ

る「屋敷地共住集団」は、この開拓村では必ずしも重要ではなく、ある程度後期の土地不足と結びつく過渡的な状況として捉えたほうがよいかもしれない。

移動の単位となったのは幾組かの夫婦からなる小グループと考えてもよい。このことはガロックばかりでなく、ほぼ同じ時期にクランタン川に沿ってガロックの北側の地域に開かれた福建系華人の集落パシルパリットにもあてはまる。現在のガロックで顕著になってきた移動は、このような開拓移動とはかなり異なる様相を持つ。それは、基本的には未婚の若年者による移動から成り立っており、昔日を上回る拡散の傾向を示す。

集落人口は、1990年代のピークを経て、ようやく減少の兆しを示し始めた。家数こそ微増しているが、世帯員数には僅かながら減少が見られ、単身高齢者世帯の消滅が帰郷者を伴わない場合には、世帯数の減少が必至である。年金生活者を含む新たな帰村者あるいは来住者が、このような世帯数の減少をいくらか補う可能性を示唆している。こうして、村とも町ともいえない新しい集落が生まれるのかもしれない。自給用食糧や商品作物の生産を目的として土地に意義付けが行なわれた時代から、居住空間としての土地が評価される時代に移った。そこでは、農業的な営みは一部の人々によって続けられるとしても、多くの人々は生活手段を集落外に求める構造がある。クランタンという工業化の遅れた州が、地方としての独自性を保ちつつ、その人口を維持することができるかがガロックの存続にかかわっている。このような状況が、日本の村とどのように類似し、どのように異なっているかを判断する必要がある。

タイとマレーシアの食文化

西 瀨 光 昭*

我々の研究ネットワークグループは、新型腸炎ビブリオによる下痢症が1995年頃にアジアのどこかで発生し、世界的大流行を起こしていることを発見した。この感染症の発生と伝播に関する研究のためタイ南部とマレーシアを訪れた際に興味あることに気が付いた。この菌は海水中に分布し海産物を汚染する。汚染した海産物を充分加熱しないで食べた場合感染する可能性がある。私はこの新型の菌がアジアのどのような環境で発生したかという点に興味を持ち調査を計画した。アジアから関空に到着する海外旅行者の中でこの下痢症を起こしていた患者の多くがタイからの帰国者であったので、Varaporn Vuddhakul 博士（ソクラ大学理学部助教授、1998年6月から1年間東南アジア研究センターの外国人研究員）に現地で頑張ってもらった。彼女は、1999年にハジャイの鮮魚店で現地の魚介類を購入し目的菌の有無を調べた。その結果、アカガイの1種 (*Anadara granosa*) からついに目的菌を分離できた。この発見によって海に面していないラオスでも1997年にこの感染症が大流行したという謎が解けた。アジア・アフリカ地域研究研究科の岩田助教授に依頼してラオスの魚市場で撮影してもらった写真の中にこの貝が写っていたのだ（写真1）。ルートは不明だが、タイから輸入されたのであろうと推察できる。タイではこの貝は比較的安価で、庶民に好まれている。その調理のしかたが独特である。完全に加熱せずといわゆる半生で食べるのが美味しいと言われている。ソクラ大学医学部の協力により、1999年1月から12月までの1年間に、ハジャイの2つの市中病院で下痢患者の便を検査したところ、なんと300症例以上の腸炎ビブリオ感染症が確認され、そのほとんどが新型の腸炎ビブリオによるものであった。貝はフィルターフィーダーで海水中の有機物や微細な

生物を濾過して栄養源にしているもので、いわば微生物の宝庫みたいなものである。これを充分加熱せずに摂食するのは危険極まりないことである。現地の人々も、この貝を食べるとよく下痢をすることは知っている。やめたほうが良いと説明しても、返ってきた答えは「マイ ペン ライ！」だった。

一方ハジャイの南に隣接するマレーシアでもマレーシア・プトラ大学 (UPM) の研究者の協力を得て調査をした。驚いたことに、この国では腸炎ビブリオ感染症は非常に希であることが明らかになった。例えばマラヤ大学の医学部附属病院では、1カ月に1名の腸炎ビブリオ患者が見つければ多いほうである。国立の行政・研究機関である Institute of Medical Technology (IMR) での聞き取り調査でも、腸炎ビブリオ患者はそんなにいないとのことであった。しかし現地の鮮魚店ではタイと同様なスタイルで魚介類（問題のアカガイも含む）を売っていることを確認した。2000年の7月にマレーシア国民大学 (UKM) 医学部で講演したときにこのことを聴衆に投げかけてみた。問題のアカガイの写真を見せるなり、聴衆の数人がにやりとして、明快な回答をしてくれた。マレーシア人は、タイ人がこれをどのようにして食べるか良く知っていて、そのようないい加減な調理はしないとのことであった。考えてみれば、

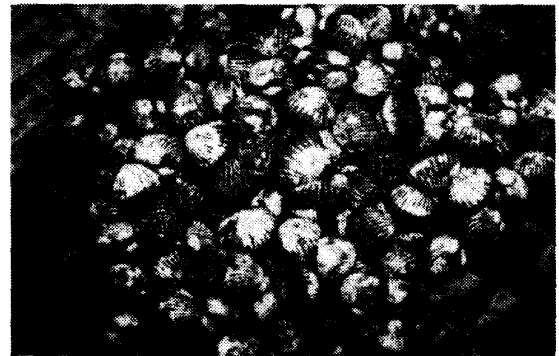


写真1 ラオスの魚市場で販売しているアカガイの1種 (*Anadara granosa*)。アジア・アフリカ地域研究研究科の岩田助教授撮影。

* Mitsuaki Nishibuchi, 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University



写真2 1999年10月にUPMで実施した食品の安全性に関するワークショップの開会式の様子。

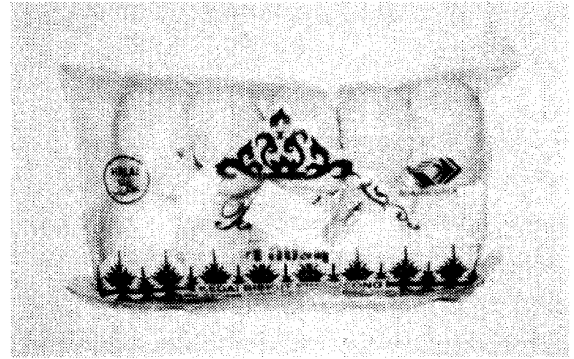


写真3 「HALAL」表示のついた食品の例。マレーシアの市場で購入。

マレー系の人々は口に入れるものに良く注意を払っている。我々は、UPMで定期的に食品の安全性に関するワークショップを行っている（写真2）。1999年と2000年のワークショップには、公衆衛生省の食品品質管理部門のトップが自発的に参加し、政府の積極的な姿勢をアピールしてくれた。また一昨年、我々が開発した食品用消毒剤をマレーシアで普及させようとした時、「HALAL」表示について実地勉強することになった。この表示のついた食品等は宗教的な意味も含めて安全であるので、イスラム系の人々は食品類を選定する時、このマークの表示に注意する（写真3）。この表示権を取得するには専門の委員会での厳しい審査をパスせねばならない。

委員会では、食品あるいはそれに添加される製品中の原材料まで詳しく調査し、場合によっては原材料の製造場所まで調べに行くこともある。

タイの「マイ ペン ライ」食文化とマレーシアの「HALAL」食文化の差は腸管感染症の発生率の差としてはっきりと現れた。ラオスでは「マイ ペン ライ」食文化の影響を受けているのではないだろうか。また、他の東南アジア地域では果たしてどうであろうか。大変興味深いところである。タイあるいは近隣諸国での調査時にアカガイを食べる時には、くれぐれもご用心を！加熱したといっても、どの程度加熱したかが重要である。